

科学分析支援センターの今後

総合研究機構長 川橋正昭

科学分析支援センターには、ここ数年、これまでにないペースで新たな共同利用機器が導入されてきた。そのことは、特に基礎科学分野における基礎研究および教育の充実に大きく貢献してきたと思われる。科学分析支援センターに設置されている機器は特定専門分野で利用されるものが多く、センターを利用する研究者も比較的限定されている。にもかかわらず、全学的支援のもとで概算要求などに力を注ぎ、センターの充実が図られてきたことに大きな意味がある。そのことは、センター機器を利用する研究者が大いなる研究成果を上げることに対する期待が高いことを示している。

一方で、センターは基礎科学教育に対する役割も期待されていることから、設置設備が必ずしも最先端の研究に十分対応できているとは言えない側面もある。より先端的な研究を推進して成果を上げるには、個々の研究者による外部資金獲得等による機器の整備が求められるのも当然である。それに結びつくような基礎的研究の支援ができれば、センターの役割は十分果たせたとと言えるであろう。現在、大学の組織の現状が第二期中期目標・計画を達成するに十分かどうか検討されているが、上で述べたような科学分析支援センターが果たすべき基本的役割は、今後も変わることはないことから引き続きその機能の充実が図られていくであろう。

基本的に研究者であることを求められる大学教員がさらなる研究の高度化を目指していくことを支援する立場にあるものとして、このたびの東日本大震災について様々な思いを馳せざるを得ない。センターの設備も一部震災の直接的被害を受け、その後の計画停電でも影響を受けた。しかし、それは言わば些細なことであり、より大きな本質的問題に向き合わなければならない。

大学教員は、何があっても研究者としての自負をもちつつ大学本来のあるべき姿の中で日々の研究教育活動を行っていくのは当然のことである。しかし同時に、このたびの大震災とそれに続く福島第一原子力発電所事故の状況を、個々の教員がどのように受け止めているのか、どのように行動しようとしているのかが、大学教員としての社会的役割の中で、さらに個人の在り方においても、強く問われることになる。今年の3月11日を境に大きく変わったものは、少なくとも今後10年は我々の生き方に様々な影響を及ぼし続けるであろう。さらに数十年は、事故のあった原子力発電所原子炉の廃炉処理の問題、汚染された環境の回復問題に直面していくことになる。このような、3月11日以前とは全く異なる状況は、大学における研究教育にも少なからず影響を及ぼす。大学は、未曾有の出来事がもたらした様々な問題に対する具体的対応において、まさに中心的役割を担う人材を輩出していくことになる。その意味で大学の責任は大きい。一方、今ほど科学者への信頼が揺らいでいる状況はかつてなかったであろう。たとえそれが大いなる誤解に基づく一方的な思い込みであろうとも、科学者として全く責任がないわけではない。科学者が社会を構成する一員である以上、社会の中で信頼を得る言動や、責任ある情報提供が求められる。このような状況において、科学者が真に科学的に振る舞い、科学者に対するある意味での不信感を取り除くにも、大学の役割、責任は大きい。いまこのとき、大学教員には、自らの位置付けと役割の認識に基づく適切な判断と行動が求められている。

いずれにせよ、大学教員はどのような状況にあっても研究の歩みを止めることなく優れた研究成果を上げ続けなければならない。科学分析支援センターが引き続きそのための支援に大いなる役割を果たしていくことを期待する。